

荻原本称友俱舍論釈に混入した安慧釈断片

青 原 令 知

はじめに

かつて、龍谷大学仏教文化研究所（現・世界仏教文化研究センター）では複数の共同研究により、称友（Yaśomitra）の俱舍論釈（*Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, 以下 SA）の梵文写本の複製を可能な限り収集する継続事業が行われた。その経緯は青原2003で報告した通りであるが、恥ずかしい話、それ以来20年もの間、この知的財産に何も手が付けられないまま放置されていた。気がつけば当時の主任であった若原雄昭教授も定年退職され、事情を知る者は筆者だけになってしまった。その間、能仁正顕教授による梵文写本の共同研究の一員に名を連ねさせて頂いておりながら、生来の無精な性格が災いして何度も発表する機会を逃してしまった。その能仁教授もこの度定年退職を迎えられるということで、遅きに失した感はあるが、再び貴重な資料をひも解いて、そのご恩に報いるべく愚筆を草する次第である。

周知のように俱舍論注釈書で SA と双璧をなすのが、安慧（Sthiramati）の注釈（*Tattvārthā Abhidharmakośaṭīkā*, 以下 TA）である。近年、新出の梵文写本が公表され、⁽¹⁾ 解読が進められつつあるので、梵文を直接比較検討することが可能になった。そうした中、現行 SA 校訂本にはしばしば TA が混入したと思われる記述があるが、筆者は収集した SA 写本を整理する過程において、その TA 混入の原因とおぼしき事実が一点の写本にあること見いだした。本稿の目的はこの事実を紹介することに尽きる。それにより現行の SA

校訂本の問題点も浮彫りになるであろう。非常に重要な事実なので、順を追って詳細に報告したい。

1. SA 写本と荻原本

はじめに我々が収集しえた SA 写本複製について、写本間の相互関係などをあらためて推察する。収集済みの SA 写本のうち完本は以下の 7 本である。⁽²⁾

NN1 ネパール国立古文書館写本 1 (364葉)

NN2 ネパール国立古文書館写本 2 (352葉)

NN4 ネパール国立古文書館写本 4 (321葉)

AC カルカッタ・アジア協会写本 (338葉)

CU ケンブリッジ大学写本 (362葉)

UT 東京大学写本 (高楠順次郎招来) (488葉)

KU 京都大学写本 (榊亮三郎招来) (487葉)

これらの写本はすべていわゆるネパール写本であり、いずれも近代になって書写されたものである。また、W: 723, 2-3に見られる末尾の結頌の欠落箇所がすべての写本に共通している⁽³⁾ので、すべて同一の源泉から派生したものと推定される。残念ながら、源泉となった元写本は現存しない。

さらにこれら 7 点の先後関係について、詳細は省くが、奥書の系統、一部に共通する同一箇所の大幅な脱漏などから判断して、ある程度の書写の系統が想定しうる。その中で最も古い書写と思われるのが CU すなわちケンブリッジ写本である。その理由は、他の写本に比して欄外の追加書き込みが極めて頻繁に見られることによる。書き漏らした語句の補填だけでなく、複数行にわたる長文の記述が行を指定して書き込まれ、指定行には x 印などで対応箇所が記される。そして他の写本にこれらを確認すると、CU の欄外記述がほとんどの場合に本文中に挿入してある。

それだけでは、単なる CU の書写漏れの補正と見ることもできるが、それにしてはあまりに長文が多く、意図的な加筆とみた方が自然である。決定的なのは、これらの長文書き込みのほぼすべてがチベット訳 (SA-T) に存在

しないことである。おそらくこれらの欄外の記述を取り除けば、チベット訳者が見たはずの原本と等しくなるに違いない。AC をはじめ後続の他の写本はこの CU の欄外補充の指示に従って、本文中に記述を追加したものと思われる。

SA 研究の底本として定番といえる、荻原雲来による校訂本 (Wogihara1932-1936=W 本) は、チベット訳や本論両漢訳など参照しうるものは漏らさず活用し、異読も細かく脚注に記されており、その精度の高さは驚嘆に値する。公刊以来90年を経て今なお信頼を失わず重用され続けているのも頷ける。この W 本はその序文の記述による限り、CU を参照していない⁽⁶⁾。当然 CU の欄外記述に言及することもなく、他の写本同様、その記述を本文に取り込んだテキストとなっている。荻原は多くの場合、それがチベット訳に欠いている事実を確認していて、“om. Tib.,” “deest in Tib.” などと丁寧に注記している。特に、その箇所が [] で表記されることがしばしばあるが、荻原自身が内容に疑問を呈していることを表わすのであろう。実際、これらの挿入文のほとんどが蛇足のようなもので、これを有さない SA-T の方が意味がよく通じる。CU を参照しえなかった荻原は疑問を抱きつつも、他の写本に倣って挿入文を含むテキストを用いたのである。

2. SA に混入した TA の断片

さて、従来の SA の翻訳研究等において、これらのチベット訳に欠いた記述の一部が TA すなわち安慧 (Sthiramati) の注釈 (*Tattvārthā*) と類似する、さらには混入であるとの重要な指摘がしばしばなされてきた。筆者は指摘された事例の中に、上述の CU 欄外記述文に対応するものがあることに気付き、確認してみた。もとより先行研究は TA のチベット訳 (TA-T) からの考察であったので、参照可能となった TA 梵文写本 (TA-Ms) は必見であった。そうすると早速、並行文が見いだされた。TA-T の所在が確認済みだった事例なので当然ではあった。そこで、他の CU 欄外記述例を洗いざらい検証してみた。すると、「CU で欄外に記述されている」「チベット訳に存在しな

い」, この2つの条件を満たすだけで, 検証したすべての事例において TA-⁽⁹⁾Ms に何らかの並行文が確認され, 一件の例外もないことが判明した。また TA と一致しても LA (俱舍論満増釈 *Lakṣaṇānūsāriṇī*) に対応しない事例も少なからず存在するため, LA に相当する可能性は否定される。⁽¹⁰⁾CU の欄外記述は純粋な遺漏補正の場合を除き, すべて TA からの流用とみて間違いない。

以上のような事例は, 特に第5章随眠品 (CU: 236b-270b) に集中的に現われている。他の章においてもいくつか確認できるが, 第5章での出現頻度はその比ではない。その理由等については今後の課題として残し, ひとまず本稿では巻末に「資料編」として随眠品における総計29例のCUの欄外記述とTA-⁽⁹⁾Msの対応箇所を一覧しておいた。情報共有して頂けたら幸いである。

紙数の関係上, この「資料編」には必要最低限の情報しか提供しえなかった。ので, 若干の事例を取り上げて以下に解説する。

まず, CU: 265b には一葉に【25】～【29】の5箇所もの欄外記述がある。そのうち【27】【28】【29】の事例を前後の文を含めてTAと比較してみる。下線部がCUの欄外記述相当部分で, SA-Tに欠如する箇所と全く一致する。太字はSA・TAの完全一致, 斜体字は類義的一致を表わす。関連資料の情報は資料編を参照のこと。

(W: 498, 20-29) tatr' ālaṃbana-prajñānāt kāmāvacarāḥ sva-dhātv-ālaṃbanā rūp'ārūpyāvacarās ca duḥkha-samudaya-*dr̥g-ghēyāḥ* prahīyaṃte. tatra visabhāga-dhātv-ālaṃbanānām ālaṃbanam pariññayā paśyataḥ prahāṇam duḥkha-samudayānvaya-jñāna-kṣāṃtyor yugapad dvi-dhātv-ālaṃbanatvāt sva-bhūmy-ālaṃbanānām iti viśeṣaṇam. visabhāga-dhātu-sarvatraga-nirāsārthaṃ. tad-ālaṃbana-saṃkṣayād iti. visabhāga-dhātu-sarvatragā ālaṃbanam eṣāṃ **satkāya-dr̥ṣṭy-ādīnām** iti. tad-ālaṃbanāḥ sabhāga-dhātu-sarvatragāḥ. teṣāṃ kṣayāt prahāṇāt. te visabhāga-dhātu-sarvatragāḥ prahīyaṃte. [tad-

dhetutvenopastambha-prahāṇād visabhāga-dhātu-sarvatragāṇām
⁽¹¹⁾
prahāṇam ālambana-pahāṇā].

(TA-MS: 31b4-6) svabhūmyāmbanānām i+ti | svabhūmigrahaṇaṃ vis
 abhāgadhātusarvvatraganirāsārthaṃ, anāsravāmbanānām ceti
 anāsravagrahaṇaṃ sāsravāmbanānirāsārthaṃ, **tatrāmbanaparijñānāt**
kāmāvacarāḥ svadhātvāmbanāḥ rūpārūpyāvacarās ca duḥkha-
samudaya |pra| **darśana**prahātavyāḥ **prahīyamte, tatra hi visabhāga-**
dhātvāmbanānām *apy* **ālambanaṃ pariññāyā paśyataḥ prahāṇaṃ**
bhavati **duḥkhasamudayānvayajñānakṣāntyor yugapāt**
dvidhāmbanatvāt, tadāmbanasamkṣayād iti visabhāgadhātusarvva-
ttragāḥ sabhāgadhātusarvvatragāṇām yeśāṃ ālambanaṃ satkāyāṃ
tagrāhadṛṣṭyādīnām **te tadāmbanās teṣāṃ samkṣayaḥ prahāṇaṃ,**
 etad uktam bhavati, **upastambhaprahāṇād visabhāgadhātusarvvatra-**
gāṇām prahāṇam nāmbanaparijñānād iti, katham punas te teṣāṃ
 upastambhatve ● na kalpanta taddhetubhāvā na tv evaṃ sati hetu-
 samudghātād eva vaktavyaṃ paryāyenaitad evoktaṃ bhavaty asaṃ-
 karārthaṃ tv evaṃ ucyate sarvve hi te parasparahetukā ity atas tad-
 āmbanaprahāṇavacanena visabhāgadhātusarvvatragā eva sukhaṃ
⁽¹²⁾
 vijñāyate nānye,

CU が欄外に追加した 3 箇所はすべて SA-T に欠く部分と一致し、それぞ
 れに対応する TA-MS の並行文が認められる。ただし全文が一致するわけ
 ではなく、darśana-prahātavya- → dṛg-gheya- 等の変換や bhavati, api 等の省
 略がみられる。また【29】の部分は W 本では [] で示され校訂者自身が
 疑問視している。実際、最後の ālambana-pahāṇā の語は解釈に苦しむ。し
 かし TA-MS 対応箇所では nāmbanaparijñānād とあり、脈絡を保っている。
 おそらくこれは後続文を含めて衆賢の『阿毘達磨順正理論』(=NA) からの
⁽¹³⁾
 流用と思われる。CU 引用文はその文脈を踏まえ安易に省略した形になり
 錯綜が起きているのである。

【21】の事例は SA-T に欠く範囲が CU 欄外記述と異なる例である。

(W: 488, 8-13) āsavaṃti saṃsāra ity āsavaṃti. nairukto vidhiḥ. āsanārtho vā āsavaṃti. bhavāgrād yāvad avicim ity. ṣaḍbhir āyatana-vraṇaiś cakṣur-ādibhir āyatanair vraṇa-bhūtair āsavaṃti kṣaraṃti. bhavāgrād yāvad avicim gacchaṃti. **bhavāgrāvītarāgasyāpy āvīcika-kleśa-samudācārāt tad-utpannasya vā tatrotpatti-sambhavāt.** ka⁽¹⁴⁾ āsavaṃti. anuśayāḥ. āsavaṃtīty āsavaṃti ity ac-pratyayaḥ.

(TA-Ms: 29a6-7) āsavaṃtīti vistaraḥ, **bhavāgrāvītarāgasyāpi** ṣaḍāy-atanāśrayeṇā**āvīcika-kleśasamudācārāt tadupapannasyāpi** vā**ttatrotpatti**⁽¹⁵⁾**bhavyatām** adhikṛtya yāvad avicim āsavaṃtīty uktam,

漏 (āsava) の語義解釈 (AKBh: 308, 15) への注釈部分である。SA が一通り AKBh の語義解釈の意味を解説しているのに対して、TA はむしろ「有頂から無間地獄に至るまで」の語句のみの解釈となっている。CU はこの本来 SA になかった解釈を TA から抜粋して示しているのである。

しかし CU の抜き書きは下線部だけであるが、SA-T に欠けるのは文末の ity ac-pratyayaḥ までである。残りの欠落は CU に起因するものではない。SA-T は純粋なサンスクリット文法的な解釈を翻訳せず放棄することが少なからず見られるので、この場合もそれに該当するのであろう。

【7】【8】の事例は、連続した文に表われ、先行研究により修正案が示されている箇所である。

(W: 457 4-13) a) **nāvaśyam iti. prahīṇaṃ na samudācaraṭīti niyamaḥ.** b) **tathā hi śraddh'ādi-middha-duḥkhendriya-cakṣur-ādayaḥ prahīṇa api samudācaramti.** c) **darśana-heyānām antarmukhatvāt. bhāvanā-hey'ālaṃbanaiva rāga-dveṣa-mohair vijñaptir utthāpyata iti. bhāvanā-heyam eva vadh'ādi-paryavasthānam.** vadh'ādi-paryavasthānam iti. ādi-śabdenādatt'ādāna-kāma-mithy'ācāra-mṛṣāvada-grahaṇam. tad bhāvanā-heyam bhāvanā-heyā-dharm'ālaṃbanatvād iti. bhāvanā-heyā

d) vadh'ādika-sattv'ādayaḥ eva dharmā asy' ālaṃbanam iti kṛtvā, satkāya-drṣṭy-ādayo 'pi hi yady api bhāvanā-heyān dharmān ālaṃbanṃ te na tu kevalaṃ bhāvanā-heyā ity ato na te bhāvanā-heyāḥ.⁽¹⁶⁾

(TA-Ms: 18b10-11) **a) nāvaśyam iti** na hy attraikāṃtena **niyamo** 'sti **prahīṇaṃ na samudācarati** aprahīṇaṃ vā samudācaratīti, **b) tathā hi śraddhādīmiddhaduḥkhendriyacakṣurādayaḥ prahīṇā api samudācaran[ti]**, aprahīṇaṃ api kiṃcin na samudācarati, tadyathā vadhādiparyavasthānaṃ, bhāvanāheyadharmmālaṃbanatvād iti, yad etad **d) vadyādiki satvādi** tad bhāvanāheyaṃ rūpādisamudāyatvād, rāga dveṣamohāś ca darśanaheyālaṃbanā eva taddarśanaheyā na bhāvanāheyālaṃbanāḥ **c) darśanaheyānāṃ cāntarmukhapravṛttatvād bhāvanāheyālaṃbanair eva rāgādibhir vviññaptir utthāpyata iti bhāvanāheya+[m] e[va] vadhādiparyavasthānaṃ,**⁽¹⁷⁾

一見して分かるように、CUが欄外に引いた a) ～ c) の語句は、TA では本来異なる構文の注釈中に別々に散在していた語句であり、CU はこれを併せて抜粋し、さらに別な箇所⁽¹⁸⁾で d) を欄外に引いている。この事例では舟橋1986および小谷・本庄2007によって補足修正案が提示されている。SAの「脱落文」をTA-TとNAによって補足するものである。かなり大胆な修正案であったが、そうでもしなければ、これらの補足文はそのままでは意味が通じないのである。

以上の事例では、CUの欄外補足はTAのそのままの流用ではなく、何らかの意図をもって抜粋し、あるいは一部を改編して引いている。資料編に挙げた事例の多くは少なからず同じ要素をもっている。他の章の事例は検証の途上ではあるが、例外はほほないものと予想される。

おわりに

以上の事実をどのように解釈すべきだろうか。CUの欄外記述は決して

SA 本文に追加文の挿入指示をしたものなどではなく、むしろその箇所を理解の補助となるメモ書き程度のもののように思える。しかしそうだとしたら、まずその当事者は TA の梵文を参照しうる立場にあったはずであり、またこのような抜粋引用を行なうためには、かなりの知識と SA、TA 両者の読み込みが必要であろう。またその記述の端々から、TA の説を支持している気配も感じ取られる。そしてこれは CU 書写者自身の操作なのか、それとも先行する未知の写本を参照したのか、誰が何の目的で行なったのか等々、現存の限られた資料からは読み解くのは困難である。

少なくとも現行の W 本は、諸資料の関係を探る上で有益ではあるが、SA の本来の姿を表わすものではない。CU に後続する写本が概ね本文に追加文を挿入したがために、ありもしない SA 異本が出来上がってしまったのである。おそらく SA 本来の姿はチベット訳業に用いられた原本が最も近いはずである。そして、現存する写本からそれが知られるのは唯一 CU ということになる。新たな校訂を施してその元の形を再現することが、学術的には求められるところであろう。少なくとも第 5 章については、早急な再校訂が必要である。将来への課題として、取りあえず資料を提示しておくものである。

(資料編)

- SA 第 5 章(随眠品)において CU (ケンブリッジ写本)で欄外補足となっている箇所でチベット訳を欠いている事例(29例)を収集し、TA 梵文写本の並行文を対応させた。短文の事例は前後の文章を示して分かり易くしたかったが、紙数の関係で該当語句のみを抽出した。
- ・ SA 文は W 本の表記を流用し、引用を示すイタリックはすべてローマン体に改めた。必要に応じて異読修正を行なっている。
- ・ TA-Ms は暫定的な写本の転写にとどめ、本格的な校訂は行っていない。
- ・ () は一致しない語句を示す。
- ・ イタリックは同義語などの部分的な相違を示す。
- ・ 【7】【8】【16】は、部分的な一致が順不同に表われるので、a), b) 等の符号を用いて対応位置を示した。

【 1 】 W: 442, 16–21 (n.9) (AKBh: 277, 8)

soḍaśety ⁽¹⁹⁾ *anyaḥ*. eṣu śaṭ prakṣipyā. āśraya-dauṣṭhulyaṃ janayaty akarmaṇyat'āpādanāt. guṇān dveṣṭi tad-virodhitvāt. apavādānām āspadi-karoti vidvad-vigarhita-kāya-karmotthāpanāt. sat-pathād udvartayati viparīta-daiśika-saṃsevā'bhimukhī-karaṇāt. vividhānartha-bijaṃ ropayati sarva-saṃsāra-vyasanānām tat-prabhavatvāt. ādhipatya-phalena ca lokasyāniṣṭam upasaṃharati tad-*vegena* bāhya-bhāva-vikār'āpatteḥ.

(TA-Ms: 14b3–4)

soḍaśety *apare* | eṣv (eva daśasu anyāni) śaṭ prakṣipyā, (tāni punar) āśrayadauṣṭhulyaṃ janayaty akarmmaṇyatāpādānād guṇāṃ +dveṣṭi tadvirodhitvāt apavādānām āspadīkaroti vidvadvargarhitakāyavāḥkarmmotthāpanāt satpathād udvarttayati aviparītadeśikasamsevābhimukhīkaraṇād vi«vi»dhānarthabijaṃ ropayati sarvvasaṃsāravasyasanānām tatprabhavatvād ādhipatyaphalena ca lokasyāniṣṭam upasaṃharati tad*vaśena* bāhya-bhāvavikārāpatter iti,

SA-T: D.ngu88b6; P.chu99b4 (=om.); CU: 237a (margin).

TA-T: D.do98b5–99a2, P.tho228b8–229a5; LA: D.chu89a3, P.nyu109a7 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 4, 13–5, 1 (n.13); NA: 596a21–b07.

【 2 】 W: 442, 24 (n.13) (AKBh: 277, 5–11)

premād dveṣo jāyate māt'ādayo 'pīti *sūtram*.

(TA-Ms: 14b5)

(evaṃ hy uktam) *sūttre premṇo* dveṣo jāyate (evaṃ) māt'ādayo 'pi (veditavyāḥ),

SA-T: D.ngu88b6; P.chu99b4 (=om.); CU: 237a (margin).

TA-T: D.do99a2–3, P.tho229a5–7; LA: D.chu89a4, P.nyu109a8–b2.

Cf. 小谷・本庄2007: 5, 3 (n.17); NA: 596c05–07.

【 3 】 W: 445, 17–27 (n.6) (AKBh: 280, 9–11)

satkāya-dṛṣṭir eka-prakāreti. ātm'ātmīy'ākāreṇa duḥkhe vipratipannatvāt duḥkha-darśana-heyai⁽²⁰⁾va. evaṃ aṃtagrāha-dṛṣṭir iti. asāv apy ātmābhimatasya vastunaḥ śāsvatocchedāmt'āropād⁽²¹⁾ duḥkha eva vipratipanneti duḥkha-darśana-heyai⁽²⁰⁾va. mithyā-dṛṣṭiś catuṣ-prakāreti. duḥkh'ādi-satya-lakṣaṇāpavāda-pravṛttatvāt satya-catuṣṭaye 'pi vipratipanneti. catuḥ-satya-darśana-heyā. evaṃ dṛṣṭiparāmarśo 'pi catuṣ-prakāra eva. sa hi hīne 'gra-darśanaṃ. tatra *samudaya*-nirodha-mārga-prahey'ālambanaḥ *samudaya*-nirodha-mārga-darśana-

heyaḥ. śeṣo duḥkha-darśana-heyaḥ. evaṃ vicikitsā sarvatrasaṃśay'ākāreti sarvatra-vipratipannatvāc catuḥ-satya-darśana-heyā. śīlavrataparāmarśo dviṣ-prakāra iti. Īśvar'ādiṣv ahetuṣu hetu-grāho nity'ātma-viparyāsāt pravartata iti duḥkha-darśana-heyaḥ. amārge mārga-darśanaṃ mārga-darśana-heyaḥ.

(TA-Ms: 15b5-7, 16a7)

(tad evaṃ) satkāyadr̥ṣṭir ekaparakāre<ti> ātmiyākāreṇa duḥkhavipratipannatvād duḥkhadarśanaheya*iti*, evaṃ anta+rgrāhadr̥ṣṭir iti asāv apy ātmābhimatasya vastunaḥ śāśvatocchedāṃtasamāśrayaṇād duḥkha eva vipratipanneti duḥkhada●rśanaheyaiva, mithyādr̥ṣṭiḥ catuṣprakāreti duḥkhādisatyalakṣaṇāpavādapravṛttatvāt satyacatuṣṭaye pi vipratipanneti catuḥsatya●darśanaheya, evaṃ dr̥ṣṭiparāmarśo pi catuḥprakāra eva sa hi hīne gradarśanaṃ tatra samudāyanirodhamārggapraheyālaṃbana+ḥ samudayanirodhamārggadarśana*praheyaḥ* śeṣo duḥkhadarśanaheyaḥ, evaṃ vicikitsā sarvvatra saṃśayākāreti sarvvatra vipratipannatvāt catuḥsatyadarśanaheyaḥ, śīlavrataparāmarśo dvi●prakāra iti īśvarādiṣv ahetuṣu hetu*grāho* nityātmaviparyāsā●t pravartata iti duḥkhadarśanaheyaḥ amārge mārgga-darśanaṃ (>16a7) mārggadarśanaheyaḥ.

SA-T: D.ngu91b2; P.chu102b5 (=om.); CU: 239a (margin).

TA-T: D.do103b2-7, P.tho235a6-b6; LA: D.chu92a2-6 P.nyul13b2-114a1.

Cf. 小谷・本庄2007: 21, 2-17 (n.3).

【 4 】 W: 446, 18-24 (n.3) (AKBh: 280, 16-20)

(rūp'arūpya-dhātvor duḥkhābhāvāt pratighābhāvāḥ.) duḥkhāyāṃ hi vedanāyāṃ pratigho 'nuṣete. sā copari nāstīti. dveṣāś ca rūkṣo vāta-vyādhivat. te ca sattvāḥ śamatha-snigdha-saṃtataya iti. vipākābhāvāc ca. anīṣṭo hy asya vipākāḥ. tau *dhātau* vigatāniṣṭa-vipākau. āghāta-vastv-abhāvāc ca. na hi tatra bāhyāḥ kuśa-kṣāra-kaṇṭak'ādayo n' ādhyātmikā *tāpā*spasmār'ādayaḥ saṃti. maitry-ādi-kuśala-mūla-*sambhū*tatvāt parigrahābhāvāc ca.

(TA-Ms: 15b7-9)

(apratighāś ta eva rūpadhātāv ity uktaṃ atha kasmād upari pratigho nāsti tadanuśayavastvābhāvā) duḥkhāyāṃ hi vedanāyāṃ pratigho nuṣete sā copari nāstīti (asaṃbhavas tatra pratighasya) ● dveṣāś ca rūkṣo vātavādhivat te ca satvā<s śa>mathasnigdhasaṃtataya iti vipākābhāvāc ca anīṣṭo hy asya vipākāś tau (ca) *dhātū* vigatāniṣṭa●vipākau āghātavastvābhāvāc ca na hi tatra bāhyā<ḥ> kuśakṣāra-kaṇṭakādayo nādhyātmikā *vātā*spasmārādayaḥ santi maitryādikūśalamūlā*vā*sabhūtatvāt parigrahābhāvāc ceti,

SA-T: D.ngu92a6; P.chu103b2 (=om.); CU: 239b (margin).

TA-T: D.do105b7-106a3, P.tho237b5-238a1; LA: D.chu92b5, P.nyul14b1 (=om).

Cf. 小谷・本庄2007: 23, 14-24, 2 (n.14); NA: 602c03-12.

【 5 】 W: 450, 1-2 (n.1) (AKBh: 281, 15)

[katham tarhi vitarāgāṇaṃ kām'ālaṃbana-dṛṣṭi-samudācāra (ity āha.) dṛṣṭy-utpāde(ty-ādi).]

(TA-Ms: 16b4-5)

(yady evaṃ) katham tarhi vitarāgāṇaṃ kāmālaṃbanadrṣṭisamudācāraḥ, dṛṣṭyutpāda(samakālaṃ te parihīṇāḥ),

SA-T: D.ngu94a6; P.chu107a4 (=om.); CU: 241b (margin).

TA-T: D.do108a5-6, P.tho241a2- 3; LA: D.chu95a2-3 P.nyul17b4-5.

Cf. 小谷・本庄2007: 32, 1-2 (n.23).

【 6 】 W: 450, 11 (unnoted) (AKBh: 281, 21)

sarvaiveti. pañca-prakārā 'pi. satkāya iti. pañcasūpādāna-skandheṣu.

(TA-Ms: 16b9)

sarvvaiveti pañca ● prakārāpi, (sāsravālaṃbaneti anāsravālaṃbanāto viśeṣaṇaṃ,) satkāya iti pañcasūpādānaskandheṣu,

SA-T: D.ngu95b3; P.chu107b1 (=om.); CU: 242a (margin).

TA-T: D.do109a2-3, P.tho242a1- 2; LA: D.chu95a6-7 P.nyul18a3-4.

Cf. 小谷・本庄2007: 36, 3-4 (unnoted).

【 7 】 W: 457, 4-7 (n.2) (AKBh: 285, 18)

a) nāvaśyam iti. prahīṇaṃ na samudācaratīti niyamaḥ. **b)** tathā hi śraddh'ādī-middha-duḥkhendriya-cakṣur ādayaḥ prahīṇā api samudācaraṃti. **c)** darśana-heyānām antarmukhatvāt. bhāvanā-hey'ālaṃbanaiva *rāga-dveṣa-mohair* vijñaptir utthāpyata iti. bhāvanā-heyam eva vadh'ādī-paryavasthānaṃ.

【 8 】 W: 457, 10-11 (n.5) (AKBh: 285, 20-21)

d) vadh'ādika-sattv'ādayaḥ.

(TA-Ms: 18b10-11)

a) nāvaśyam iti (na hy attraikāṃtena) niyamo ('sti) prahīṇaṃ na samudācaratī, (aprahīṇaṃ vā samudācaratī)ti, **b)** tathā hi śraddhādīmiddhaduḥkhendriyacakṣurādayaḥ prahīṇā api samudācaraṃ[ti], (aprahīṇaṃ api kiṃcin na samudācaratī, tadyathā vadhādīparyavasthānaṃ, bhāvanāheyadharmmālaṃbanatvād iti, yad etad) **d)** *vadhyādiki satvādi* tad

bhāvanāheyaṃ rūpādisamudāyatvād, (rāga-dveṣa-mohāś ca darśanaheya-lambanā eva taddarśanaheya na bhāvanāheya-lambanāḥ) **c)** darśanaheya-nāṃ (cā)ntarmukhapravṛttatvād bhāvanāheya-lambanair eva *rāgādibhir* vviññaptir utthāpyata iti bhāvanāheya+[m] e[va] vadhātiparyavasthānaṃ.

SA-T: D.ngu102b3, 5; P.chu115b4, 6 (=om.); CU: 246a (margin).

TA-T: D.do118a7-b4, P.tho252a5-b2; LA: D.chu101a4-6, P.nyu126a6-b2.

Cf. 舟橋1986; 小谷・本庄2007: 61, 7-10 (n.16), 14 (n.17); NA: 610b04-11.

【 9 】 W: 462, 21-23 (unnoted) (AKBh: 289, 7)

api ca parāmarśau yady anāsrav'ālambanau syātāṃ samyag-drṣṭi-lakṣaṇaṃ bhajetāṃ. śuddhatvād agratvāc cānāsravāṇāṃ. ataś ca na darśana-heyau syātāṃ (agrau).

(TA-Ms: 21a9)

api ca parāmarśau yady anāsravālambanau syātāṃ samyagdrṣṭīlakṣaṇaṃ bhajetāṃ, śuddhatvād agratvāc cānāsravāṇāṃ, ataś ca na darśanaheyau syātāṃ iti,

SA-T: D.ngu107b3; P.chu121b3 (=om.); CU: 248b (margin).

TA-T: D.do128a6-7, P.tho262b7-263a1; LA: D.chu106b2-3, P.nyu133b6-8.

Cf. 小谷・本庄2007: 82, 2-5 (n.19); NA: 615a12-14.

【10】 W: 463, 28 (unnoted) (AKBh: 291, 4)

kuśala-mūla-vipakṣeṇa vyavasthānāt.

(TA-Ms: 22a5)

kuśalamūlapratipakṣe |pe| ṇa vyavasthā²³pnāt.

SA-T: D.ngu108b5; P.chu122b8 (=om.); CU: 249b (margin);

TA-T: D.do131b6, P.tho266b4; LA: D.chu108a7, P.nyu136a5 (=om).

Cf. 小谷・本庄2007: 190, 13-14 (unnoted).

【11】 W: 469, 27-31 (n.6) (AKBh: 296, 15-16)

yady anāgatam atīta-pratyutpannābhyāṃ viyuktaṃ syāt. evaṃ sati nānāgatam evotpannam atītam veti syāt. athātītam anāgata-pratyutpanābhyāṃ viyuktaṃ syāt. nānāgataṃ vartamānaṃ cātītaṃ syāt. vartamānam atītānāgatābhyāṃ viyuktaṃ syāt. anāgatam eva vartamānaṃ vartamānam evātītaṃ syāt.

(TA-Ms: 23a4-5)

yadi (hy) anāgatam atītapratyutpannābhyāṃ viyuktaṃ syād, evaṃ sati nānāgata[m] evotpanna ● m atītaṃ ceti syā(t), athātītam anāgatapratyutpannābhyāṃ

viyuktaṃ syān, nānāgataṃ varttamānaṃ cātitaṃ syāt, (tathā yadi) varttamānaṃ atītānāga●tābhyam viyuktaṃ syād, anāgataṃ eva varttamānaṃ varttamānaṃ eva cātitaṃ (iti na) syād,

SA-T: D.ngu114a5; P.chu129a6 (=om.) ; CU: 252a (margin);

TA-T: D.do136a5-b1 P.tho271b6-272a1; LA: D.chu113a3, P.nyu142b1 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 125, 1-5 (n.53).

【12】 W: 472, 5-6 (unnoted) (AKBh: 298, 1)

(athā)nāgatāditvaṃ kāritrasya sva-rūpa-sattāpekṣayā evaṃ bhāvānām apy anāgat'āditvaṃ bhaviṣyati. kiṃ kāritra-kalpanayā.

(TA-Ms: 23b10-11)

(yathā ca) kāritrasyānāgatāditvaṃ svarūpasattāpekṣayā (vyavasthāpyate), evaṃ bhāvānām apy anāgatāditvaṃ bhaviṣyati, kiṃ kārित्रparikalpanayā,

SA-T: D.ngu116a3; P.chu131a8 (=om.); CU: 253b (margin).

TA-T: D.do139a7-b2, P.tho275b1- 4; LA: D.chu114b5-7, P.nyu144b1-2.

Cf. 小谷・本庄2007: 1429, 14-16 (n.65); 秋本2020: 518, 11-15.

【13】 W: 474, 23-24 (n.4) (AKBh: 299, 25)

tad eva tad-vikīrṇam iti. yad eva tad vartamānaṃ. tad eva vikīrṇam atītānāgataṃ.

(TA-Ms: 25a6)

tad eva tadvikīrṇam iti, yad eva tad varttamānaṃ tad eva vikīrṇam atītānāga●taṃ,

SA-T: D.ngu118a6; P.chu133b8 (=om.); CU: 254b (margin).

TA-T: D.do145a6-7, P.tho282a7-b1; LA: D.chu117b4, P.nyu147b6 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 135, 4-5 (n.85).

【14】 W: 477, 26-30 (unnoted) (AKBh: 301, 17)

yad yastu prahīṇam ity-ādi. iha prahāṇam prāpti-vigamāt. viśaṃyogas tad-ālaṃbana-kleśa-prahāṇāt. *darśana-bhāvanā-mārgāv adhikṛtya prahīṇe duḥkha-dṛggheya ity-ādi.* prāk prahīṇe ity-ādi.

(TA-Ms: 26a12-b1)

{ta} «ya»d vastu prahīṇam iti *vistarāḥ*, iha prahāṇam prāptivisaṃyogād (abhipretam), viśaṃyogas tadālaṃbanakleśaprahāṇān, (na hi tadālaṃbanakleśaprahāṇam tasmin na pra+hīṇe bhavatiity ata āha yatra tāvad viśaṃyukta iti vistarāḥ, aprahīṇe 'pi tadālaṃbane kleśe prahāṇam astity ata āha syāt tu prahīṇam ityādi.) *darśanagottram adhikṛty* (āha) *prahīṇe duḥkhadṛggheya iti vistarāḥ*,

bhāvanāmārggam adhikṛty (āha) prāk prahiṇe (prakāre ce)ti-ādi,
SA-T: D.ngu121a3; P.chu137a3 (=om.); CU: 256a (margin).
TA-T: D.do150b1-3, P.tho288a4- 8; LA: D.chu120b1-3, P.nyu151a4-7.
Cf. 小谷・本庄2007: 149, 10-15 (n.2).

[15] W: 481, 14-21 (n.4) (AKBh: 303, 12-14)

etāny eva śoḍaśa cittāni śaṭtriṃśad (bhavaṃti). kāma-dhātau duḥkha-samudaya-darśana-*heyam* a-sarvatraga-saṃprayuktaṃ sabhāga-visabhāga-sarvatraga-saṃprayuktaṃ ca. evaṃ rūpa-dhātau duḥkha-samudaya-darśana-*heyam* pratyekaṃ tri-prakāraṃ. ārūpya-dhātāv anyatra visabhāga-dhātu-*bhūmi*-sarvatraga-saṃprayuktāt. nirodha-mārga-darśana-*heyam* dhātu-traye 'pi pratyekaṃ dvidhā s'āsravānāsrav'ālaṃbanatvāt. bhāvanā-*heyam* api kliṣṭākliṣṭa-bhedāt *dvi-prakāraṃ*. anāsravam api dharma-jñāna-pakṣaṃ anvaya-jñāna-pakṣaṃ ceti dvidhā.

(TA-Ms: 27a4-5)

etāny eva śoḍaśa cittāni (sukhāvabodhārthaṃ punaḥ) śaṭtriṃśad (kriyante), kāmādhātau duḥkhasamudayadarśana-*prahātavyam* asarvvatragasaṃprayuktaṃ sabhāgavisabhāga-*dhātusarvvatragasaṃprayuktaṃ* ca, evaṃ rūpadhātau duḥkhasamudayadarśana-*prahātavyam* pratyekaṃ triprakāraṃ, ārūpyadhātāv anyattra visabhāgadadhātusarvvatragasaṃprayuktān, nirodhamārggadarśana-*prahātavyam* tu dhātutraye 'pi pratyekaṃ dvidhā sāsraṇvānāsravālaṃbanatvāt, bhāvanā-*prahātavyam* api kliṣṭākliṣṭabhedād *dvidhā bhidyate*, anāsravam api dharmmajñānapakṣaṃ anvaya-jñānapakṣyaṃ ceti dvidhā (bhidyate).

SA-T: D.ngu124a7; P.chu140b7 (=om.); CU: 258a (margin).

TA-T: D.do153b4-154a1, P.tho291b6-292a4; LA: D.chu122b7, P.nyu154a4 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 158, 11-16 (n.20).

[16] W: 484, 30-485, 1 (n.7) (AKBh: 304, 19; 305, 10)

a)sarvasya sarvānaṃtaram utpatti-saṃbhavān **b)**nāsty eṣāṃ utpattau *sārvajanyaḥ* krama-niyamaḥ. **c)**duḥkhataḥ skandhān apohyeti. nedaṃ duḥkham ity ātmato 'bhiniveśāt. **d)**rūpaṃ ātmety evaṃ-dṛṣṭikasya **e)**vedan'ādy-ātma-grāha-dṛṣṭiḥ pratyānikā.

(TA-Ms: 28a7-9)

(athaiśāṃ daśānāṃ anuśayānāṃ kathaṃ pravṛttir bhavātīti.) **b)**nāsty eṣāṃ utpattau sarvvajanyaḥ kramaniyamaḥ, **a)**sarvasya sarvānantaram utpatti-saṃbhavād, (bā●hulyāt tūtpattyānugūnyena kramanirddeśaṃ adhikṛtyāha,

ādita eva tāvad avidyāyogād iti vistaraḥ.) **c)**duḥkhataḥ skandhān āpohya nedam duḥkham iti, ātmato 'bhiniveśād (iti ayam attrābhiprāyaḥ,.... tasmād) **d)**rūpam ātmety evamdr̥ṣṭikasya (vedanādyātmagrāhadr̥ṣṭikasya) **e)**vedanādyātmagrāhadr̥ṣṭiḥ pratyanikā,
SA-T: D.ngul27b1, P.chul44a6 (=om.); CU: 259b (margin).
TA-T: D.do159a4-b3, P.tho297b8-298a7; LA: D.chul27a3-b1, P.nyu159a6-b5.
Cf. 小谷・本庄2007: 168, 3-7.

[17] W: 486, 5-9 (n.2) (AKBh: 306, 22)

sarveṣāṃ teṣāṃ iti. kām'āsrav'ādināṃ saṃsārasya ca. *ukto* hy avidyā hetu-saṃrāgāyety-*ādi*. yāḥ kāścana dur-gatayaḥ asmin loke paratra ca avidyā-mūlikāḥ sarvā icchā-lobha-samutthitā iti (ca).

(TA-Ms: 28b8)

sarvveṣāṃ hi teṣāṃ iti, kāmāsravādināṃ saṃsāra●sya ca *uktaḥ* hi avidyā hetuḥ saṃrāgāyety *vistaraḥ*, (punar apy uktaṃ,) yāḥ kāścana durgatayaḥ asmin loke parattra ca, avidyāmūlikāḥ sarvā icchālobhasamutthitā iti,

SA-T: D.ngul28b1, P.chul45b1 (=om.); CU: 260a (margin).

TA-T: D.do161b1-3, P.tho300b1- 3; LA: D.chul28a6-7, P.nyu160b7-8.

Cf. 小谷・本庄2007: 174, 13-16 (n.9).

[18] W: 486, 21-22 (unnoted) (AKBh: 307, 6)

avasthānānukūlatā calatvāt paṭutvāc ca.

(TA-Ms: 28b9)

(na kilāsyānukūlateti) avasthānānukūlate(ty arthaḥ), calatvāt paṭutvāc ca (dr̥ṣṭayaḥ kevalānavasthānānukūlāḥ),

SA-T: D.ngul28b5, P.chul45b6 (=om.); CU: 260a (margin).

TA-T: D.do161b1-3, P.tho300b1- 3; LA: D.chul28a6-7, P.nyu160b7-8.

Cf. 小谷・本庄2007: 177, 6 (unnoted).

[19] W: 487, 20-21 (unnoted) (AKBh: 307, 19)

iṣṭa-viṣaya-parivarjaneneti. rasa-parityāga-bhūmi-śayyā-mala-paṃka-dhāraṇa-nagna-caryā-keśollumcan'ādinā śuddhi-pratyāgamanāt.

(TA-Ms: 28b11-12)

iṣṭaviṣayaparivarjjaneneti | (ata saudaryaṃ vṛttiparisamkhyānaṃ) rasaparityāgaḥ bhūmiśayyā malapaṅkadhāraṇaṃ nagnacaryā keśollumcan (ādikam cety evam)ādinā śuddhipratyāgamanāt,

SA-T: D.ngul29b2, P.chul46b6 (=om.); CU: 260b (margin)

TA-T: D.do162a1-2, P.tho30a3- 4; LA: D.chu128b3-4, P.nyu160a5-6.

Cf. 小谷・本庄2007: 180, 15-16 (unnoted).

[20] W: 488, 2-6 (n.1) (AKBh: 308, 11)

ālaṃbanataś chidrānveṣi-śatruvat drṣṭi-viṣavac ca. saṃprayogato 'yo-⁽²⁵⁾
guḍodaka-saṃtāpavat sparśa-viṣavac ca. ubhayato dhātṛi kumārakav[ad]
anuśerate. evam ete 'py ālaṃbanāt saṃprayuktebhyo vā svām saṃtatiṃ
vardhayaṃtaḥ prāptibhir upacimvanti. anubadhnanti. anukrānteś
cāturthaka-jvaravan mūṣikā-viṣavac cety anye.

(TA-Ms: 29a3-4)

ālaṃbanataḥ sāmprayogataś ceti, ālaṃbanataś chidrānveṣiśastruvad
drṣṭivīṣayavac ca, saṃprayogataḥ ayoguḍodakasamāpavat sparśaviṣavac ca,
ubhayatas (tu) dhātṛi kumārakavad anuśerate, (sā hi tu mārakam vardhayanti
upacinoty), evam ete 'py ālaṃbanāt saṃprayuktebhyo vā svām santantiṃ
vardhayaṃtaḥ prāptibhir upacimvanti, anubadhnanti anupakrānteś
cāturthakajvaravan mūṣikāviṣavac cety anye,

SA-T: D.ngul30a1, P.chu147a5 (=om.); CU: 261a (margin).

TA-T: D.do162b4-7, P.tho301b7-302a2; LA: D.chu129a4, P.nyu161b8 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 184, 8-15 (n.10, 11).

[21] W: 488, 11-13 (n.10) (AKBh: 308, 15)

bhavāgrāvītarāgasyāpy āvīcika-kleśa-samudācārāt tad-utpānnasya vā
tatrotpatti-saṃbhavāt. ka āsravanti. anuśayāḥ. āsravanti āravā ity ac-
pratyayaḥ.

(TA-Ms: 29a6-7)

(āsravanti vistaraḥ,) bhavāgrāvītarāgasyāpi (śaḍāyatanāśrayeṇ)
āvīcīkaleśasamudācārāt tadupapānnasyāpi vā ttatrotpattibhavyatām
(adhikṛtya yāvad avīcim āsravanti uktam.)

SA-T: D.ngul30a3, P.chu147a8 (=om.); CU: 261a (margin).

TA-T: D.do163a5-6, P.tho302b1- 2; LA: D.chu129a4-5, P.nyu161b8.

Cf. 小谷・本庄2007: 185, 2-4 (n.15).

[22] W: 488, 20-21 (unnoted) (AKBh: 308, 17)

mahatā bhisamkāreṇa kuśalair dharmaiś citta-saṃtānaḥ pratisroto nīyate
viṣayebhyo nivāryate.

(TA-Ms: 29a8)

mahatābhisamkāreṇa kuśalair dharmmaiś cittasantānanauḥ pratisroto nīyate

viṣayebhyo nivāryate,

SA-T: D.ngul30a5, P.chu147b4 (=om.); CU: 261a (margin).

TA-T: D.do163b2-3, P.tho302b7- 8; LA: D.chu129b1-2, P.nyu162a6-7.

Cf. 小谷・本庄2007: 185, 13-14 (n.19).

[23] W: 491, 20-21 (unnoted) (AKBh: 310, 3)

akuśala-dharmāpāya-gati-duḥkha-daurmanasya-sadbhāvāt, ghana-kleśatvāc ca.
(TA-Ms: 29a8)

a ku ś a l a d h a r m m a (s a d b h ā v ā d) a p ā y a g a t i (s a d b h ā v ā t)
duḥkhadaurmanasyasadbhāvād ghanakleśatvāc ceti,

SA-T: D.ngul33a1, P.chu150b6 (=om.); CU: 262b (margin).

TA-T: D.do166a3-4, P.tho305b5- 6; LA: D.chu131a6-7, P.nyu164b1-3.

Cf. 小谷・本庄2007: 199, 14 (n.10).

[24] W: 493, 25-26 (n. 5) (AKBh: 312, 8)

kleśa-pravṛtṭy-anuvṛtṭer aparipūrṇa-kleśa-lakṣaṇatvāc copakleśāḥ.
(TA-Ms: 30a7)

(cittopakleśanād iti cittasya kli ● ṣṭatvakaraṇāt) tatpravṛtṭ(ṭ)yanuvṛttayaḥ (upakleśāḥ)
aparipūrṇaṁ kleśalakṣaṇā (dharmmāḥ) upakleśā (ity ācakṣate),

SA-T: D.ngul35a2, P.chu153a4 (=om.); CU: 263b (margin).

TA-T: D.do166a3-4, P.tho307b8-308a3; LA: D.chu133a2-3, P.nyu166b3-5
(=om).

Cf. 小谷・本庄2007: 207, 12-13 (n.7).

[25] W: 498, 16 (unnoted) (AKBh: 319, 18)

nirodha-mārga-dṛg-gheyam mithyā-dṛṣṭy-ādikaṁ.
(TA-Ms: 31b3-4)

(nirodhamārggadarśanaprahātavyānām api sāsra-vālaṁbanānām) nirodhamārg
gadarśanaprahātavyaṁ mithyā-dṛṣṭādikam (ālaṁbanam tatra duḥkhasamu-
dayasaṁgrhātavād duḥkhasamudayadharmmānvayajñānakṣāntibhiḥ
parijñāyate)

SA-T: D.ngul39a3, P.chu157b8 (=om.); CU: 265b (margin).

TA-T: D.do174b5-6, P.tho315b5- 7; LA: D.chu137a4-5, P.nyu171b1-2.

Cf. 小谷・本庄2007: 235, 12 (n.8).

[26] W: 498, 19 (unnoted) (AKBh: 319, 18)

na ca tadā teṣām ālaṁbanam parijñāyate pūrvam eva jñātavāt.

(TA-Ms: 31b4)

(na ca te tadā prahīyante kin tarhi paścān nirodhamārggadharmmānvayajñān
akṣāntibhir), nna ca *teṣāṃ tadā*lāmbanaṃ parijñāyate pūrvvam eva
parijñātavāt,

SA-T: D.ngu139a4, P.chu158a1 (=om.); CU: 265b (margin).

TA-T: D.do174b6-7, P.tho315b7- 8; LA: D.chu137a5-6, P.nyu171b2-3.

Cf. 小谷・本庄2007: 235, 13-14 (unnoted).

[27] W: 498, 20-24 (unnoted) (AKBh: 319, 23)

tatr' ālāmbana-prajñānāt kāmāvacarāḥ sva-dhātv-ālāmbanā rūp'ārūpyāvacarāś
ca duḥkha-samudaya-*drg-gheyāḥ* prahīyaṃte. tatra visabhāga-dhātv-
ālāmbanānām ālāmbanaṃ parijñāyā paśyataḥ prahāṇaṃ duḥkha-samudayānvaya-
jñāna-kṣāntyor yugapad dvi-dhātv-ālāmbanatvāt.

(TA-Ms: 31b5)

tatrālāmbanaparijñānāt kāmāvacarāḥ svadhātvālāmbanāḥ rūpārūpyāvacarāś
ca duḥkhasamudaya {pra} *darśana*prahātavyāḥ prahīyaṃte, tattra (hi)
visabhāgadhātvālāmbanānām (apy) ālāmbanaṃ parijñāyā paśyataḥ prahāṇaṃ
(bhavati) duḥkhasamudayānvayajñānakṣāntyor yugapaḥ dvidhālāmbanatvāt,

SA-T: D.ngu139a4, P.chu158a2 (=om.); CU: 265b (margin).

TA-T: D.do175a1-3, P.tho316a2- 4; LA: D.chu137a7, P.nyu171b5 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 235, 17-236, 2 (n.13).

[28] W: 498, 26 (unnoted) (AKBh: 319, 24)

(visabhāga-dhātu-sarvatragā ālāmbanaṃ eṣāṃ) satkāya-dṛṣṭy-ādinām (iti. tad-
ālāmbanāḥ sabhāga-dhātu-sarvatragāḥ. teṣāṃ kṣayāt prahāṇāt.)

(TA-Ms: 31b5)

(tadālāmbanasamkṣayād iti visabhāgadhātusarvvatragāḥ sabhāgadhātu-
sarvvatragāṇāṃ yeṣāṃ ālāmbanaṃ) satkāy(āṃtagrāha)dṛṣṭyādinām(te
tadālāmbanās teṣāṃ samkṣayaḥ prahāṇaṃ.)

SA-T: D.ngu139a5, P.chu158a3 (=om.); CU: 265b (margin).

TA-T: D.do175a3-4, P.tho316a5; LA: D.chu137b1, P.nyu171b6-7 (=om.).

Cf. 小谷・本庄2007: 236, 3 (unnoted).

[29] W: 498, 28-29 (n.6) (AKBh: 319, 24)

[(tad-dhetutven)opastambha-prahāṇād visabhāga-dhātu-sarvatragānām
prahāṇaṃ ālāmbana-pahāṇā].

(TA-Ms: 31b6)

(etad uktaṃ bhavati,) upastambhaphrahāṇād visabhāgadhātusarvvatragāṇāṃ
prahāṇaṃ (nā)lambanaparijñānād iti,

SA-T: D.ngu139a6, P.chu158a4 (=om.); CU: 265b (margin).

TA-T: D.dol175a4, P.tho316a5- 6; LA: D.chu137b1-2, P.nyu171b7-8.

Cf. 小谷・本庄2007: 236, 6-7 (n.14).

〔参考文献・略号等〕

《一次資料》

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, ed. by P.Pradhan, Tibetan
Sanskrit Works Series vol.VIII, K.P.Jayaswal Research Institute,
Patna 1967.

LA *Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad mtshan nyid kyi rjes su
'brang ba zhes bya ba* (Abhidharmakośaṭikā Lakṣaṇānusāriṇī nāma),
D.No.4093: culb1-chu322a7, P.No.5594: julb1-nyu391a7.

NA 衆賢造玄奘譯『阿毘達磨順正理論』八十卷 (T1562.vol.29: 329a1-
775c3)

SA *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* of Yaśomitra.

SA-T *Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad* (Abhidharmakośaṭikā),
D.No.4092: gulb1-ngu333a7, P.No.5593: culb1-chu408a8.

TA-Ms *Tattvārthā Abhidharmakośaṭikā* of Sthiramati, Sanskrit Manuscript.

TA-T *Chos mngon pa mdzod kyi bshad pa'i rgya cher 'grel pa dod gyi de
kho na nyid ces bya ba* (Abhidharmakośabhāṣyaṭikā Tattvārthā
nāma), D.No.4421: tho1b1-do387a7, P.No.5875: tolb1-tho565a8.

《SA 写本及び校訂本等略号》

AC The Asiatic Society Culcutta Manuscript. = 青原2003 [12]

CU Cambridge University Library Manuscript. = 青原2003 [13]

KU Kyoto University Manuscript. = 青原2003 [16]

NN1~5 National Archive Nepal Manuscripts = 青原2003 [6] ~ [10/11]

UT University of Tokyo Manuscript. = 青原2003 [14]

W =Wogihara1932-1936.

《その他の略号》

D Derge Tibetan edition.

P Peking Tibetan edition.

T 大正新脩大藏經 (大蔵出版)

n. note (脚注)

om. omitted (欠落)

《二次資料》

ODANI, Nobuchiyo

- 2024 *Tattvārthā Sthiramati's Abhidharmakośaṭīkā, Chapter 1, Part I*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region (西藏自治区梵文本系列丛书) No.26, China Tibetology Publishing House Austrian Academy of Sciences Press, Beijing – Vienna.

LAW, Narendra Nath

- 1949 *Sphuṭārthā Abhidharmakośa-vyākhyā of Yaśomitra*, Calcutta Oriental Series No.31, Luzac & co., London.

LAW, Narendra Nath / DUTT, Nalinaksha

- 1957 *Sphuṭārthā Abhidharmakośa-vyākhyā of Yaśomitra*, Calcutta Oriental Series No.31, Calcutta Oriental Book Agency, Calcutta.

LÉVI, S. / STCHERBATSKY, Th.

- 1918 *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā: the Work of Yaśomitra, First koçasthāna*, Bibliotheca Buddhica XXI, Leningrad.

MATSUDA, Kazunobu

- 2016 “A Sanskrit manuscript of Sthiramati's commentary to the Abhidharmakośabhāṣya”, *Sanskrit manuscripts in China II : Proceedings of a panel at the 2012 Beijing Seminar on Tibetan Studies, Augut 1 to 5*, ed. by Horst Lasic, Xuezhu Li, Beijing: 223-230.

POUSSIN, Louis de La Valee

- 1914/18 *Vasubandhu et Yaśomitra: Troisième Chapitre de l'Abhidharmakośa Kārikā, Bhāṣya et Vyākhyā - Avec une Analyse de la Lokaprajñāpti et de la Kāraṇaprajñāpti de Maudgalyāyana, versions et textes établis d'après les sources Sanscrites et Tibétaines*, London.

SHASTRI, Swami Dwarikadas

- 1970-1973 *Abhidharmakośa & Bhāṣya of kācharya Vasubandhu with Sphuṭārthā Commentary of Ācārya Yaśomitra*, Bauddha bharati Series 5-9, Varanasi (rep. 1987).

WOGIHARA, Unrai

- 1932-1936 *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, The publishing Association of Abhidharmakośavyākhyā, Tokyo (rep.1989). (=W)

青原令知

- 2003 「『俱舍論』関係のサンスクリット写本：原典研究史の一断面」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42: 38-50.
2004 「Abhidharmakośakārikāのネパール写本について」『印仏研』52（2）: 844-841.

秋本 勝

2020 『仏教実在論の研究：三世実有説論争（下）』山喜房佛書林

小谷信千代・本庄良文

2007 『俱舍論の原典研究：随眠品』大蔵出版

舟橋一哉

1986 「梵文称友造俱舍論疏随眠品の欠落箇所について」『仏教学セミナー』44: 1-6.

松田和信

2016 「俱舍論註釈書断簡の梵文テキスト」『三友健容博士古稀記念論文集：智慧のともしび アビダルマ仏教の展開』: 130-141.

宮下晴輝

1983 「俱舍論註釈書 Tattvārtha の試訳：第七章第一偈より第六偈まで」『仏教学セミナー』38: 110（1）-87（24）.

キーワード 俱舍論註釈書 梵文写本 Sphuṭārthā Tattvārthā Sanskrit manuscript

註

(1) Matsuda 2016, Odani 2024参照。

(2) 青原2003:28-39に示した一覧でいえば順次〔6〕〔7〕〔9〕〔12〕〔13〕〔16〕に相当する。このうち、CU, UT, KUについては現在、それぞれのWebサイトにおいて鮮明なカラー画像が公開されており、誰でも閲覧可能となっている。

(3) この部分を欠くACを除く。W: 723, 1-4にある結頌は、“etad vivṛ”と“rah” prasūta^o”の間に空白を挿入することで欠落あるものとして記述され、注にチベット訳が補われている。AC以外の写本はすべてW本と同形式で記述されており、おそらく最初の書写者が用いた元本にすでに欠落があったのであり、それがそのまま継承されているのである。これを欠くACも以下に論じる諸点から、同系統に属するものである。

(4) W: 723に記述される奥書は、ACを底本としつつ、最初の詩頌を（おそらくN本から）補って構成されているが、各写本の奥書には異同がある。少々長くなるが、紹介がてらそれらを比較してみよう。まず異同のある語句を区切って記号化する。

A) W: 723, 7-8 yo 'dhitya asaṃtuṣṭaḥ 相当

B) W: 723, 9-10 tena kalpitā 相当

C) W: 723, 11-12 ācārya-yaśomitra^o samāptām iti 相当

D) dharmakośavyākhyāyam aṣṭamakośasthānam |

E) graṃthakārasaṃkhyā. 25000

F) nairātmyadṛkpravarayā na nayasthitasya deyākhyadharma

urudhīdhanabuddhakīrṇaḥ | puṇyaṃ yad atra mama tena janāstu sarvo
mātrādibhir gurujanaiḥ sahabuddhakīrtiḥ || kośasya tīkāṃ vimalāṃ
sphuṭārthāṃ lekhaṇanāt puṇyaṃ upārjitaṃ yat* | tenāstu loko khila
kośapūrṇabuddho yathā dhīdhanakośapūrṇaḥ || 7 ||

- G) ye dharmāhetuprabhavā hetun teṣāṃ tathāgato hy avadat | teṣāṃ ca yo
nirodha evaṃvādī mahāśramaṇaḥ ||
- H) deyadharmā yaṃ pravaramahāyānayāyinaḥ śākyabhikṣumahāpaṇḍitaś
risiddhamuner lekhaṇakasya yad atra puṇyaṃ tat bhavatv ācāryopādhy
āyamātāpitṛpūrvagamam kṛtvā sakalasattvarāśer anuttarajñānaphalāv
āptaya iti || śāsimunirasebde likhitam iti ||
- I) gurustake likhitam ||
- J) śubham ||
- K) śrīgaṇeśāya namaḥ || || śreyo 'stu || nepālisamvat 1036 śuklādi ||
māghamāse kṛṣṇapakṣe || pañcamyān tithau || uttaraphālguninakṣetre ||
atigaṇḍayoge aṃgāravāsare || taddine raupyakhatarka 60 dakṣiṇām
idaṃ abhidharmmakōśapustakaṃ kreyatām vṛhaspatyena || (Cf. 青 原
2003: 44)

W本では前注の称友の総結頌と連続して記述されるが、A以降が奥書になる。
A, Bは作者への讃嘆頌、C, D, Eは書誌情報、F~Jが書写者による讃徳文と筆
写記録、Kは写本購入記録のようである。これらの語句が各写本では以下のよ
うに配置されている。

AC A-C-D-E
UT A-B-C-F-G
KU A-B-C-F-G
NN1 A-B-C-F-G
CU A-B-C-F-G-H
NN2 A-B-C-F-G-H-I-J
NN4 A-B-C-F-G-H-I-J-K
W本 A-B-C-E-J

Dの語句はAC本の書写ミス(Cの衍文)のようでもあり、実質AC本は
A-C-Eの構成となる。これによりAC以外の諸写本の親近性も想定し得る。ま
た荻原の注から判断してN本(パリ・国立図書館写本)はA-B-C-Jの構成だ
ったと思われる。SA-Tの奥書(D.ngu333a5-7, P.nyu408a5-8)は、A-B-Cと
訳経記録の後E-Jに相当する文(数は18,000頌)でおわる。SA-TやAC(お
そらくN本も)はオリジナルの奥書のみを伝え、他の写本は書写者の奥書も
継承しているのである。

- (5) UT, KU, NN1, NN2は同一箇所、具体的にはW: 441, 3 anuśayavaśād から

445, 17 abhyāso まで5 ページ, 写本にして3 葉分相当の大幅な脱漏がみられる。全く同じ箇所であるため, これら4 本が同一源泉から転写した同系本であることが明白になる。しかもこの脱漏箇所は, NN4の204a 冒頭から205b 末尾までの2 葉全体と全く一致する。おそらく4 本のいずれかがNN4を参照し, 転写の際に204・205葉が何らかの理由で脱落したものである。それがそのまま他の3 本に引き継がれてしまったのである。したがって順序は不明だが, NN4→NN1/NN2/UT/KU という書写の系統が確認できる。

- (6) W 本刊行後, 別な編集者の手により二種の SA 校訂本が発刊されている。Law1949・Law/Dutt1957および Shastri1970-1973である。前者は第1-3 章と第4 章のみの再校訂であるが, Law はケンブリッジ写本を参照したらしく, それが最も正確な写本と評している。それにもとづいて W 本 (略号 J?) が少なからずは正されている点は評価できるが, 上述の欄外記述を特に問題視することなく W 本に合わせたようであるし, しかも脚注に引かれる A, B, C, S, V などの略号の詳細がどこにも説明されてなく, 参照が困難である。また Shastri 校訂本は AKBh との抱き合わせで非常に重宝するテキストである。しかし諸写本と校合した再校訂なのか定かでなく, これも本稿では参照程度にとどめた。
- (7) 荻原が W の序文 (p.1) に記した写本と略号は, C= カルカッタ写本 (底本), N= パリ・国立図書館 (Bibliothèque Nationale) 所蔵の南条文雄による書写本, T= 高楠順次郎招来の東京大学所蔵本, K= 榊亮三郎招来の京都大学所蔵本, L=Lévi's, P= Poussin's とある。L と P は第1 章と第3 章に限定していることから, L は Lévi/Stcherbatsky1918 (SA 第1 章校訂本), P は Poussin1914/18 (SA 第3 章校訂テキスト研究) を表わしているようである。また脚注で MSS と記すのは写本全般を示すのであろうが, 時折登場する S の略号は説明がなく特定しがたい。T と K はそれぞれ我々の収集した UT と KU に相当する。荻原はこれら二本には誤りが多く校訂作業に全く役に立たないとして, 途中から参照を放棄している。実際, 両者は一々指摘すれば切りがないほど誤字や脱漏が多い。結局, W 本は主として C 本と N 本にもとづいていることが分かる。また荻原が「カルカッタ写本」と呼ぶ C 本は, 欠落箇所の一致などから判断して, 我々がコルカタのアジア協会 (Asiatic Society) から収集した AC と同一とみて間違いはない。ただ N 本 (パリ写本) は我々のコレクションではいまだ未収集であるため (ひとえに筆者の怠慢による), W 本の異読注記などかすかな情報から比較検討したい。
- (8) 舟橋1986; 宮下1983: 91 (n.22) , 89 (n.56) ; 小谷・本庄2007: 186 (n.10, 11) など。
- (9) 二条件を満たさない事例を挙げれば, たとえば W: 498, 3-8 は小谷・本庄: 233 (n.21) が指摘するように SA-T にこれを欠くが, CU では全文が本文中に

- ある。そして TA-Ms の該当部分 (31b1-3) には別様の注釈が見られ、並行文は存在しない。TA-T, LA も同様である。同様の例では, W: 447, 7 (n.2) ; 456, 18-19 (n.4) (LA は SA-T に等しい) ; 490, 3-33 などが該当する。その経緯は不明であるが, SA-T の不備に起因すると思われる。また W: 510, 3-5 paścād vā samanvāgataḥ. は CU: 269b の欄外に記述があるがチベット訳は存在し, TA-Ms (35a1-2) , TA-T とともに該当文がない (LA には存在する)。おそらくこの例は CU の単純な脱漏修正と思われる。逆に CU で本文中に記される文にチベット訳が存在する場合でも, TA-Ms に並行文が見られる場合がある。たとえば W: 445, 13-14 (yohi...raju-darśanāt) ; SA-T: D.ngu91a7-b1, P.nyu102b1-3 は CU239a4 の本文中にあるが, TA-Ms: 15b5 に並行文が確認される。当初から称友が TA を流用した例であろう。それ以外は, 今のところ例外は一例も見いだされていない。さらに, 稀な例として CU の欄外記述が他の資料に全く反映されないが TA を示唆する例がある。CU253a の欄外に “manāgatamśyādi” という短い書き込みがあり, その指定する位置が W: 471, 9-10 katham tat pratyutpannam ity abhiprāyaḥ の ity の前となっている。これは該当文を “katham tat pratyutpannam anāgatam syād ity abhiprāyaḥ” と変更することを指示したものと読みとれる。しかし他の写本には全く反映されず, したがって W 本にも存在しないのである。これは三世実有の作用説批判において, 彼同分の眼を問題にする箇所 (AKBh: 297, 15) である。SA は世親の意図を「彼同分の眼は機能がないのになぜ現在になるのか」と解釈するものであるが, CU の指示に従えば「なぜ現在が未来になるだろうか」という意味になる。TA の該当箇所 (23b1) では「〔彼同分の眼は〕現在なのにそのときには未来になってしまう」(varttamānam api tadānāgatam prāpnotiti) とあり, 意味的に類似する。ただし同趣旨にするためには指示文に否定辞を入れて「なぜ現在が未来にならないだろうか」とする必要がある。そもそも SA の pratyutpannam が TA では varttamānam と同義異語を用いているので流用の形を取れず, 意味的に TA と同じ解釈を SA の文に適用したかったのではないか。しかし不備のために後続の写本には理解されなかったのである。以上の解釈が正しければ, この当事者はかなり TA に傾倒しているようにも思われる。
- (10) 補足された文の一部の語句が現存 TA-Ms と完全一致しない箇所も多く, TA, LA 以外の他の未知の注釈書引用の可能性も示唆する。しかしたとえば松田2016が報告する未知の俱舍論注釈書などと比べれば, あまりに TA との一致点が多く, やはり TA からの流用とみるのが自然であろう。
- (11) Cf. 小谷・本庄2007: そのうち, ①所縁の遍知により, 欲〔界〕繫と色・無色〔界〕繫の, 自地を所縁とする, 見苦・集所断の〔煩惱〕が断ぜられる。その場合, 非同類の界を所縁とする〔煩惱〕については, 所縁を遍知でもって見る人に断がある。苦・集類智忍は同時に二界を所縁とするからである。「自地を

所縁とする」と限定したのは、非同類の界に遍行する〔煩惱〕を除外するためである。②それを所縁とする〔煩惱〕の減尽によりとは、これら有身見などには、非同類の界にも遍行する〔煩惱〕が所縁としてあるから、それを所縁とする〔煩惱〕は、同類の界に遍行する。それら（有身見など）が減尽することによって、〔つまり〕断ぜられることによって、それら非同類の界に遍行する〔煩惱も〕断ぜられる。〔その因であるがゆえに、支えが断ぜられることによって、非同類の界に遍行する煩惱が断ぜられる。能縁の断である。〕

- (12) (試訳) 自地を所縁とするについて、「自地」と言及するのは、異類の界に遍行するものを除外するためである。また無漏を所縁とするについて、「無漏」と言及するのは、有漏を所縁とするものを除外するためである。その中で所縁を遍知するから、欲界繫の自界を所縁とする、また色・無色界繫の見苦・集所断の〔煩惱〕が断じられる。その場合、さらに異類の界を所縁とするものの所縁を遍知して見る者には断がある。苦・集類智忍は同時に二種を所縁とするからである。それを所縁とするものが減尽するからについて、異類の界に遍行する〔煩惱〕が同類の界に遍行する有身・辺執見等の〔煩惱〕の所縁であるとき、それらはそのとき所縁であり、それらの減尽が断である。こう説かれたことになる。支えの断によって異類の界に遍行する〔煩惱〕の断があり、所縁の遍知によるのではない。〔論難〕ではなぜそれらがそれらの支えであるのにその原因となると想定しないのか？〔答釈〕だがそうであっても原因を損なうから言われるべきではない。相互にこれだけが説かれているのであり、混乱しないためにそのように説かれる。それらはすべて相互因となる。だから「その所縁の断」を語ることによって異類の界に遍行する〔煩惱〕だけが容易に知られ、他の〔煩惱〕はそうではない。

LA は後半部分が異なる。Cf. LA (D137b1-2, P171b7-8) それを所縁とするものが減尽するからについて、これら同類の界に遍行するものを所縁とする、異類の界に遍行する〔煩惱〕があり、それらはそれを所縁とする。その所縁が減尽するときそれを所縁するものが減尽し、それを所縁とするものが減尽するとき、それによって異類の界に遍行するものが尽滅する。支えを断ずるから異類の界に遍行するものが欠落する。

- (13) Cf. NA: 650a05-12 此惑於彼能作依持。依持斷時彼隨斷故。如羸病者却倚而立。去所倚時彼隨倒故。如何於彼能作依持由此於彼能爲因故。豈不此即說由害因故斷。實爾此彼但是異名。然爲止濫故作是說。謂欲界惑自他界緣。皆有此彼互爲因義。然無此彼展轉相緣。故於此中說能緣斷。欲令易了唯他界緣。由斷此因彼便隨斷。
- (14) Cf. 小谷・本庄2007: 184, 17-185, 5輪廻の中に留ませる (āsayamti) から漏である (āsrava) というのが、語義解釈的な〔説明〕法である。あるいは〔輪廻の中に衆生が〕居住するように漏出する (āsravamti) から〔漏である〕。有

頂より無間地獄に至るまでという場合、六処という傷口〔つまり〕傷口にたとえられる眼などの処から漏出する (āsraṃti)〔つまり〕流れ出す。有頂から未だ離染していない者にとってさえ、無間地獄に導く煩惱が現行することによって、あるいはそこ（有頂）に生じた者には、そこ（無間地獄）に生ずることがありうることによって、有頂より無間地獄に至るまで趣く。何が漏出するかといえば、睡眠である。漏出するから漏であるという場合、〔作者を示す第一次接尾辞〕a〔が用いられているの〕である。Cf. 小谷・本庄2007: 187 (n.15)。

- (15) (試訳) 漏出する云々とは、有頂から離染していない者にとってさえ、六処を所依として無間地獄に導く煩惱が現行することによって、あるいはそこに生まれた者にもそこに生まれる可能性があることに関して「無間地獄に至るまで漏出する」と言われた。

- (16) 小谷・本庄2007: 61 必ずしも〔現行し〕ないとは、「断ぜられた〔修所断の煩惱〕は現行しない。或いは断ぜられていない〔修所断の煩惱〕は現行する」ということが決定しているのではない。なぜなら離欲者の信など〔の五根〕や睡眠や苦根や眼などは断ぜられていても現行するからである。あるものは、断ぜられていなくても現行しない。例えば、未離欲の聖者における (10c) 殺生等の如くであるという場合、「等」の語は、偷盜、邪淫、妄語を示す。それは修所断である。修所断の法を所縁とするからとは、その殺生などの〔対象となる〕有情などという所縁が修所断の法のみだからである。たとえ有身見なども修所断の法を所縁とするとしても、修所断のみを〔所縁とするの〕ではないから、ゆえにそれらは修所断ではない。

以上の和訳は舟橋1986の2ヶ所にわたる修正案をさらに修正した以下の文にもとづいている（イタリック：舟橋補足修正箇所、下線：小谷らの修正箇所）。

nāvaśyam iti, prahīṇaṃ na samudācarati aprahīṇaṃ vā samudācaratīty anīyamaḥ, tathā hi vītarāgasya śraddhādi-middha-duḥkhendriya-cakṣur-ādayaḥ prahīṇā api samudācaramti, kiṃcit aprahīṇaṃ api na samudācarati, tadyathā avītarāgasya āryasya vadhādi-paryavasthānaṃ...

na tu kevalaṃ bhāvanā-heyān ity ato na te bhāvanā-heyāḥ, darśana-heyānām antarmukhatvāt. bhāvanā-heyālabhānaiva rāga-dveṣa-mohair vijñaptir utthāpyata iti. bhāvanā-heyam eva vadhādi-paryavasthānaṃ.

TA-Ms と比して舟橋らの指摘の確かなことが証明される。ただし NA から補足した「未離欲の聖者」(avītarāgasya āryasya) の限定は TA には存在しない。

- (17) (試訳) 必ずしも〔現行し〕ないとは、この場合「断ぜられた〔修所断〕は現行しない、あるいは断ぜられていない〔修所断〕は現行する」と絶対的に定まっているのではないからである。すなわち信等・睡眠・苦根・眼等は断ぜられても現行し、あるものは断ぜられていなくても現行しない。たとえば

[V-10c] 殺害等の纏は〔修所断であるように〕。修所断の法を所縁とするからとは「この者が殺害されるべき等の有情等だ」という〔所縁〕があれば、その〔所縁〕は修所断である。色等の集積だからである。また貪・瞋・癡は見所断を所縁とするもののみがその見所断であり、修所断を所縁とするものは〔見所断では〕ない。そして見所断は内門転であるから修所断を所縁とする貪等のみによって表〔業〕は等起される。よって殺害等の纏は修所断のみである。

- (18) 【16】も同種の事例である。
- (19) CU/NN4: anye; AC: anya.
- (20) 脚注の開始番号が欠落している。以下の引用の冒頭に記されるべきであろう。
- (21) SA-T: D.ngu91b2; P.chu102b5 (=om.); CU: 239a (margin); Cf. 小谷・本庄2007: 25 (n.3).
- (22) TA-Ms に錯綜がある。(15b7) ...mārggadarśanaṃ の後 vyavastheti とあり文章が続かない。TA-T が正しく、それにもとづけば (16a7) mārggadarśanaheyāḥ, kidṛśā...te mārggadarśanaheyāḥ, がこの間に入るべきである。なお小谷・本庄2007: 25 (n.4) は samudaya-nirodha-mārga-prahey'ālaṃbanaḥ を samudaya-nirodha-mārga-darśana-heyālaṃbanaḥ に訂正している。同様の誤りが TA-Ms 対応箇所にも存在することが注目される。
- (23) W 本脚注 6 と 7 が入れ替わっている。
- (24) LA の前後の記述は SA-T と類似している。
- (25) dhātrī kumārakavad] em. W: dhātryaḥ kumārakam. Cf. W: 488 (n.5, 6).
- (26) CU の欄外記述は °sambhavāt までで、残りは本文中にある。CU 欄外部分のみ TA に対応する。TA にはない ka 以下はおそらく文法解釈のため SA-T が翻訳放棄したものと思われる（本論の解説参照）。
- (27) TA-T は最後の 2 句が nyon mongs pa sdugs pa'i phyir ro と省略され、LA の方がむしろ TA-Ms に対応する。

《付記》

本稿脱稿後、本学で未収集だったフランス国立図書館写本（N 本）は Web サイト上で写本画像が公開されていたことを知った。取り急ぎ確認したところでは、本稿で推定した奥書情報などに概ね間違いはなかった。機会を改めて詳細に検討したい。